

絵本の魅力 絵本の力

執筆者：竹迫 祐子

掲載誌：「学校図書館」 2009年6月号 全国学校図書館協議会

壁を越える力

「センセイ、もう一回『もけらもけら』を読みましょう！」と、少したどたどしい日本語でひとりの学生が手を上げた。すると、他の学生たちも口々に「読みたい！読みたい！」。ベトナム、ホーチミンで日本語を学ぶ学生の絵本翻訳ボランティアを対象にした講座でのこと。彼女たち 20 余人は、日本語学習を活かして、日本の絵本を翻訳しては、市内の図書館等々で紹介する活動をしている。以前、その活動を紹介されたときに、彼女たちが手がけた絵本を見せてもらったとき、彼女たちの絵本を見る目は、どうしても文章に目が行きがちなのだと感じた。『翻訳』ということに主眼が置かれた活動のため、それも無理からぬこと。けれど、せつかく絵本と触れ合うのであれば、ぜひとも絵も文章もあわせて総合的に絵本の魅力を知ってほしいと思い、絵本講座を買って出た。

はじめに、まずはウォーミングアップで『ウラパン オコサ』からスタートする。「ウラパン」が 1、「オコサ」が 2、その二つの言葉で展開する数絵本である。最初の 2 場面を読めば、後は誰もが参加できるこの絵本は、言語が異なる国での講座で紹介しても、困った

ことは一度もない。読み進むに従って、みんなの声は、だんだん大きく、元気に早くなっていく。

これが「絵本の力」だと思う。年齢の違いはもとより、国や民族の違い、言語の違いを越えて、やすやすとその壁を飛び越え、人びとの心に届き、ひとりのもとより、みんなでも楽しめる。絵本という文化財ならでは力である。

心をくすぐる力

以前、テレビの収録で、子どもたちに絵本を読んだことがある。子どもの感性は鋭い。はじめて会うオバサンに、カメラを抱えたオジサン。日ごろにはない状況に、落ち着かない様子の子どもたち。何冊か絵本を読み、少しリラックスした頃、『ごろごろにゃーん』を読んでみた。周知のように、この絵本は、「ごろごろにゃーん ごろごろにゃーんと ひこうきはとんでいきます」の繰り返し。ペンで描いた細密な陰影を持つ絵は、一見、子どもにはなじみにくいようにも思える。

ところが、子どもたちの中にようやくお座りができる位の赤ちゃんがひとりいた。その坊やが、「ごろごろにゃーん・・・」を繰り返すと、「きゃきゃきゃきゃきゃ」と笑い出すのである。シャレではないが、「ごろごろにゃーん」の語呂のよさが、赤ちゃんの心に響いたのである。きゃきゃきゃと喜ぶ様子は、まるで体の内側からくすぐられているように見えた。言ってみれば、<心がくすぐられている>状態とでもいうのだろうか。好きな絵本とであったとき、人はこの赤ちゃんと同じような感覚を持つ。大きくなるに従って、こんなに素直な反応を示すことは少なくなるが、『もけらもけら』と出会ったベトナムの学生たちも

こんな感じだったのだろう。

「感動」というものの本源的なあり様は、こんなことであるように思える。

想像力を引き出す力

絵本は、「絵」と「文」が互いに作用し合って展開していく。絵の魅力と文の魅力、それぞれに大切である。とは言え、「文」と言っても、絵本ではいつも文字があるというわけではない。文字がない絵本にもストーリーはあって、豊かに読者に語りかけてくる。魅力的な絵本は、絵が文章の説明をするのでなく、また、文章が絵を説明するのでもなく、それぞれが互いに作用しあい、調和してひとつの世界を生み出している。

文字はなくともストーリーはある。そんな絵本の存在も知ってもらおうと、ベトナムでも『かようびのよる』を読んでみた。これには、正直、困惑顔の学生たち。この絵本では翻訳の出番がない。けれど、絵本の翻訳という作業は、単に一つの言語を異なる言語へ置き換えるだけ作業ではないだろう。ひとつの絵本の世界を、トータルに他言語で伝えるという作業であるから、文と同様に絵も重要。文を読むことと同様に、「絵を読む」ということも大切である。

実は、絵本を読むときに、人は無自覚にこの「絵を読む」という行為をしている。

『かようびのよる』の作者デヴィッド・ウィズナーは、映像を学んで絵本の世界に入った人。この絵本でも文字があるのは、全編を通じてわずか5場面。まるで、映画のように、この絵本は展開していく。「絵本を構想するときは、映画の絵コンテのように絵で考えるの？それとも、あなたの頭の中で映像が動いているの？」と、本人に訊いてみた。すると、「映像をイメージして、絵コンテを考えることが多いかな？」とのこと。映画は、文字としてのシナリオがあり、それを映像にしていく絵コンテがあって、実際の撮影が進められていく。一方、絵本作家は通常、「サムネール」と呼ばれる映画の絵コンテのようなもので全体の構成や展開を考え、さらに「ダミー」と呼ばれる見本帖を作って、実際の場面展開を考えていく。つまり、絵本は、映画であれば連続して動き続ける場面の中からいくつかの場面（瞬間）を切り取って、構成し展開していくようなものである。従って、切り取られた場面以外の情景はない。しかし、人間の力は大変に優れていて、実際には描かれていない場面や情景、描かれた場面の外側の空間や、その前後の情景を想像することができる。言ってみれば、絵本を読みながら、読者自らが能動的に、自分の頭の中で映画を上映し見ているようなものである。

優れた絵本は、こうした想像力を引き出す力を持っている。

人と人を繋げる力

大人を対象にした絵本講座で、「もけら もけら でけ でけ」と読み始めると、多くの人は恥ずかしげに、困った顔をする。その顔からは、何だか、「いい年をして恥も外聞もなく、真顔でモケラモケラデケデケなんて・・・」という感じが伺える。『もけらもけら』が出版されたとき、たくさんの先生やお母さんたちから編集部へ、「どう読んでいいのかわからない、こんな絵本を作られては困る」という投書が来たのだと、作者の元永定正さんから聞いたことがある。ところが、

大人にはどう読んでいいのかわからない絵本を、子どもは易々と読み、楽しむ。いつの時代も、大概、子どもの方が大人よりはるかにキャパシティが広い。ベトナムでは、まだ十分に日本語のわからない学生たちが、まるで子どものようにこの絵本を受け入れた。絵とともに、ジャズピアニスト山下洋輔の言葉(音)を、抵抗なく楽しんだ。

しかも、読んでもらっただけでは飽き足らず、自分たちも読みたいと手を上げた。これは、私にもはじめての経験。「モケラモケラデケデケ…」と、みんなで声をあわせての大合唱は、大層楽しいものだった。

絵本の最大の魅力は、こうして人と人を繋ぐ力を持っていることかもしれない。絵本は間違いなく、親と子を、大人と子どもを繋ぐ大きな力を持っている。

人間が初めて出会う美術であり文学である絵本は、また、0歳から100歳までが楽しめる文化財でもある。絵本に関わる仕事をしていると、だからこそ、子どもは本好きであってほしいと心から思う。

とは言え、子どもは、本来、家の中で絵本を読んでいるよりは、外を駆け回っているのが好き…というのが自然。そこいらを駆るだけでキャッキヤとはしゃぎ、柱の周りをぐるぐる回っているだけで楽しくて仕方がない。それが、子どもというものである。

ここを間違ってしまうとは、本来の絵本の魅力をも、損なうことになりかねない。絵本の魅力はたくさんあるが、それは「魅力」であって、直接的で短期的な「教育的効果」を言っているのではない。絵本が、費用対効果ならぬ教育対効果のための道具や手段になってしまったとき、魅力は半減し、絵本は本来の力を失うかもしれない。同時に、真に魅力的な絵本は、駆け回っているのが好きな子どもたちにとっても、時には、遊びより心惹かれる存在になり得る。そこのところだけは、いつも間違わないでおきたいものだと思う。